

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 鷗外と漱石の漢詩－その概要－

doi:10.29714/TKJJ.199311.0006

淡江日本論叢, (4), 1993

作者/Author：曾秋桂

頁數/Page：91-119

出版日期/Publication Date：1993/11

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.199311.0006>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



鷗外と漱石の漢詩

—その概要—

曾秋桂

佐藤春夫は、「自分の見解によって明治一七年、若い陸軍二等軍医として戦陣医学と衛生学との研究のためにドイツに渡った鷗外森林太郎の洋行の事実を近代日本文学の紀元としたいと思ふ」と提言した。（『森鷗外のロマンティズム』「群像」昭和二十四年九月）。このように、日本近代文学の始まりとして位置づけられた鷗外の留学は、明治一七年から明治二十一年までのことである。四年間のドイツ留学を終えて、日本に帰ってきた当時、鷗外は、漢文学または東洋のものに対して、手厳しく批判をした。これに関連して忘れてはならないのは、ドイツ留学中、その時までに変わらぬ漢文体の日記「獨逸日記」（長谷川泉・「「在徳記」から「獨逸日記」への変貌」）の好論によれば、われわれが今日見ている「獨逸日記」は漢文体ではなかったが、実は、それは「在徳記」の漢文体を改めた結果ということである。）及び「隊務日記」を書き続けたということである。それだけではなく、鷗外が晩年に至っても熱心に漢詩を創作し、しかも、師匠について漢詩推敲に力を費したことに注意したい。要するに、儒学漢文の教養を厳しく批判したにもかかわらず、儒学漢文の教養を受けてきた鷗外には、漢詩、漢文でなければ表現できない部分があることは否定できない。言い換えれば、鷗外には、漢詩、漢文が必要であり、鷗外研究の中で、漢詩創作自体が問われるべき意味のあることだと強調したい。

一方、鷗外と並んで明治文豪と言われる漱石は、同じように晩年に至るまでに、漢詩創作を続けていた。鷗外が十才に復読した「左国史漢」を漱石も読んでいた。これによって、漱石は文学というものを認識した。儒学漢籍の「左国史漢」によって、形作られた文学観と、英文学の文学観との相違に英文学に転向した漱石は気付いた。その後、世間に小説家としてよく知られた漱石は、小説創作の傍、趣味として漢詩創作に力を注ぎ、死ぬまで続けていた。その故に、漢詩創作は漱石にとって、なくてはならぬ大きな意味を持っていたと言えよう。

また、両者における漢詩創作の重要性は度々研究者によって取り上げられた。だが、鷗外と漱石を比較して研究した従来の膨大な成果の中で、漢詩創作の観点から、両者を系統的かつ総合的に比較して研究したものは、未だに見られない。従って、筆者は漢詩創作を軸にして鷗外と漱石を総合的に比較することを研究テーマにした。

以上のことを考えた上で、本稿ではまず、鷗外と漱石を対象にして、明治の文豪である両者に何故漢詩文が必要なのかを動機として、鷗外の漢詩創作を軸にし、漱石の漢詩創作と対照して彼らの漢詩創作の概要を探っていくことにした。時期区分によって、両者の漢詩創作数を並べ比べる方法を取ることにし、西洋文明を直接に体験した時期に、両者にとって漢詩創作とは、どのような意味を持っているのかを明らかにしたい。また、漢詩創作における交遊、創作原動力の有様をも探ってみたい。

一・ 時期区分

木下杢太郎は、『木下杢太郎全集』（第十五巻、岩波書店 一九八二年）で、鷗外の生涯を七つの時期に分けている。ここでは、便宜上、その区分に従うことにする。七つの時期とは次のようである。

- 1・ 出生、少青年の時代（文久二年、一八六二年の出生より、明治十四年一八八一年、二十才、大学卒業の時まで）
- 2・ 軍医副及び留学時代（明治十五年、二十一才より二十一年一八八八年二十七才まで）
- 3・ 柵草紙の時代（明治二十二年、二十八才より二十八年一八九五年三十四才に至るまで、此間、日清戦争起り、出征の事がある）
- 4・ 目不醉草の時代（明治二十九年、三十五才より三十四年一九〇一年四十才に至るまで）
- 5・ 芸文及び万年艸の時代附日露戦役の前後（明治三十五年、四十一才より四十一年一九〇八年四十七才に至るまで）
- 6・ 豊熟の時代（明治四十二年、四十八才より大正六年一九一七年五十六才に至るまで、此間、医務局長たりし時期の大部分が含まれる）

7・晩年（大正七年、五十七才より大正十一年一九二二年六十一才易簣の日まで）

一方、高木文雄の分類によると、漱石漢詩創作を七つの時期に分けている。彼の『漱石漢詩研究資料集』（名古屋大學出版会、昭和六十二年）に従えば、七つの時期は次のようである。

- 1・青年時代（明治十七年から二十七年まで）
- 2・松山時代（明治二十八年から二十九年一月まで）
- 3・熊本時代（明治二十九年十一月から三十三年まで）
- 4・大患期（明治四十三年七月から同年十月まで）
- 5・『行人』の頃（明治四十五年五月から大正元年十一月まで）
- 6・『こころ』の頃（大正三年から五年の春まで）
- 7・『明暗』の頃（大正五年八月から同年十一月まで）

鷗外と漱石が、各時期に作った漢詩の数については、創作時期を縦軸にして、創作数を横軸とすると、それによって、表（一）のグラフが形成できる。まず、鷗外の場合を見よう。表（一）aの通り、一番多く作られたのは、第二期の「軍医副及び留学時代」の時期である。漢詩が百二十六首も残されている。漢詩創作二百二十二首の全体に占める比率は、五十七パーセントにも達している。この時期の詩作には、全体として一つの特徴が認められる。それは、すべて家を離れて旅（ドイツ留学をも含む）に出た作品ばかりであるということである。のみならず、これらの漢詩は、全部旅に出て書かれた漢文体の日記の中に書き込まれたものであることも注目される。

次は、漢詩創作の数の面においては、第二回目のピークを迎えるのは、第六期の「豊熟の時代」の時期である。漢詩が四十五首残されており、比率としては、二十八パーセント

に達している。周知のように、この時期は鷗外文学においては、最も華やかな一頁を開いた時代である。鷗外は各方面にわたって、例えば、西洋演劇の翻訳、小説の創作、歴史小説への試み、そして史伝小説への到達などにおいて、かなり多彩多様な表現意欲を見せている。そうして、漢詩創作の方にも、同様に力を注いでいる鷗外の姿が見られる。ここで注目したいのは、この時期の詩作に特徴があるということである。それは、人と応酬するために書いた詩の数が多いということである。漢詩創作数のうち、人と応酬するために書いた詩の全体に対して、四十二パーセントもの比率も占めているのである。（詳しいデータは表（五）aを参照。）この時期に応酬詩作を書く動機としては、大正天皇の即位、そして賜った御製の詩への奉和、山県有朋の誕生日への献酬など、貴顕の方とのつながりにより、恵まれた環境にあるという要素が含まれていると考えられる。これも、鷗外が高い社会的な地位についた証しであると言えよう。

一方、漱石の場合を見よう。表（一）bのように、数の面においては、二つのピークが見られる。第一期の「青年時代」のピークを迎えたのち、再び第七期の「『明暗』の頃」にピークが現れる。漢詩が一番数多く作られた時期は、やはりこの「『明暗』の頃」である。漢詩創作数の全体に対して、この「『明暗』の頃」は、三十六パーセントの比率を占めている。注目されるのは、この三カ月あまりという非常に短い間に、多数の漢詩が集中して作られたということである。漱石は『明暗』を執筆する傍、日に一首の漢詩を作った割合になる。結局、死ぬ二十日前まで、漱石は、漢詩を作っていたのである。その漱石の漢詩に対する愛着の気持は、漢詩創作数の時期区分別から推測できるであろう。

さて、この二つのピークが持つ意味を検討しよう。第一ピークの「青年時代」で旅に出ている漱石が紀行文の中に漢詩を多く書き入れていることは、まず特徴として挙げられる。内容ではその中で自然風景についての描写が、大半を占められている。そして、第二のピークの「『明暗』の頃」で「青年時代」と打って変って自宅に閉じ込もっていた漱石は、同じ自然の描写に関心を示すと同時に、さらにそこから出発して、大自然の摂理に対して憧れを託したりしている。要するに、この二つのピークを比べてみると、漱石の漢詩創作においては、思索が深まるにつれて、大自然に理想を託すという傾向を見出せる。

それから、詩体別によって分類した結果が表（二）である。表（二）aの通り、鷗外は、バラエティーに富む詩体にチャレンジしたのが特色である。とりわけ、注意したいのは、古詩を、創作数の全体に対して約十四パーセントも試みたことである。それに対して、漱石の古詩は、その半分にも達しない六パーセントのほどである。古詩よりも、近体詩（絶

句、律詩)の方が、漱石に適合し、思うままに表現しやすい詩体であったのであろう。さて、鷗外の古詩のうち、「詩以代東復松溪子」(詩を以て東に代えて松溪子に復す)の一首は注目に値する。これは、明治漢詩文壇においては、未だ曾って見られない長さの作品で、滔々と書き続けられた百二十四句もある長い古詩である。この古詩は、同じ郷里出身の伊藤孫一という友人に与えたものである。内容としては、事情があって止むを得ずに学問を止めて郷里に帰った友人を励ます一方、今まで自分が辿ってきた学問の道を述べたものである。叙情的なものよりも叙事的なものが勝っていると言えよう。とにかく、鷗外の叙事に優れた表現力に感服せざるを得ない。

次は、漱石の場合を見よう。表(二) bの通り「『明暗』の頃」になると、七言律詩が一気に作り出され、全体の三十九パーセントを占めている。そして、晩年の詩の大半は此の形式である。漱石は漢詩において、人生の最後に力を注いで七言律詩に自分の思想を託したと言えよう。通説によれば、押韻、対句、対語などの厳しい規則があるので、七言律詩は決して古詩より楽に作れるものではなく、むしろ、七言律詩の方がかなりの推敲がいるというのである。それにもかかわらず、漱石は、何よりも難しい七言律詩を、自分の思想の結晶を表す手段として選んでいた。その理由は、次のように推測できよう。人生に照らしてみれば、生きていくのは、大変なものであるが、環境が厳しければ厳しいほど、精神面において安心を求めて自由自在に生きることが出来れば、それこそ喜びを感じられる真の生活であろう。これにも関連があるかのように、七言律詩の規則が厳しければ厳しいほど、その枠の中に自由自在に自己表現が出来たら、それこそ、漢詩世界を最高に成就することができるに違いない。そこで、漱石が安心が出来て、嬉しさを感じたと共に、充実感を味わっていたことは否めない。因みに、鷗外の漢詩創作数に対する七言律詩の比率は、僅か九パーセントに過ぎない。

なお、七言律詩に次いで、五言絶句が多く作られており、全体の二十六パーセントを占めている。これは、病後弱まっていた漱石の体力のため、いろいろな制限のある漢詩大作を作るには、到底無理なことであろう。そこで、漱石は漢詩の中で一番小さいスケールの詩型・五言絶句を選んで、大患期で甦ってきた閑かな南画世界風の気持ちを表現していたであろう。とは言え、五言絶句の二十の字数に限って、しかも平仄、韻字などの詩則を考えなければならぬ制限の中、五言絶句を十分に表現するには、極めて難しい技が要するという通説の如く、五言絶句の創作は、決して簡単な事ではない。いわば一分足せば多く、一分引けば少なしのように、適切な描写が要請される五言絶句のことである。これは、中

国詩人の「詩に画あり、画に詩あり」と褒め称えられる王維に影響を受けたことは否定できない。なお、漱石の閑かな南画世界が、五言絶句によって形成できたのが、確かに漱石の優れた表現の一面があるということは疑えない。因みに、鷗外の漢詩創作数に対する五言絶句の比率は、八パーセントの程度のものである。

二. 留学と漢詩創作

創作の時代順に、鷗外の漢詩創作と漱石のそれとを対照しながら、表（三）を作った。表（三）の中では、次の二点に注目したい。

- 1・鷗外の漢詩創作においては、全体的に時間的な空白がそれほど目立たない。それに対して、漱石の漢詩創作においては、第三期から第四期に至る十年間の空白期間があることが明瞭である。

周知のように、漱石は留学先のロンドンで、大変、神経衰弱に苦しんでいた。それは、明治三十三年からの二年間の事であった。その明治三十三年の漱石の英国留学をきっかけにして、漢詩創作には十年の空白が生じたのである。すなわち、漱石が再び漢詩創作を始めた明治四十三年までは、丁度、十年の隔りがあるわけである。

- 2・漢文学が好きな漱石が、留学のためにイギリスに向った途端、漢詩創作を中止したのに対して、鷗外は夢の国のドイツへ向う途中も、またドイツ滞在中もまめに漢文体の日記をつけ、それに漢詩を書き込んでいる。

繰り返しになるが、鷗外が「在徳記」の漢文体から、今の和文体の「独逸日記」に書きかえたという長谷川泉の説は定説となっている。ところで、以上の二点を合わせて考えると、素朴な問題意識が生ずる。それは、西洋文明を体験している明治の超エリートたちは、漢文学をどのように考えているのかということである。これも漢詩創作自体は、明治文豪の鷗外と漱石にとってどういう意味を持っているのかという重要なテーマにかかわっている。『独逸日記』にある十八首の漢詩の内容面を通観すれば、友人と交際するに作った五

首の漢詩以外は、十三首のうち、九首の詠まれた対象がはっきりしていることは、特徴として見られる。それは、ルウドキヒ二世、グッデン、及び柏林の七婦人のことである。こういった人物にスポットを当てて漢詩創作したことにより、鷗外の異国の風景よりも、人物の方に関心を示していることが分かる。また、鷗外が漢字、漢詩を読めない西洋人に、漢詩を贈呈したことから考えれば、漢詩を閉塞的なものにしたくなく、それよりも、国際的なものにした鷗外の本心が推測できよう。要するに、ドイツ留学を通して、鷗外の漢詩創作に加えた新しい国際的な意味が伺われ、注目すべき所である。

一方、前述したように、漱石はイギリス留学した期間、一首の漢詩を作っていなかった。その理由を考えるには、イギリスにいた漱石が妻の鏡子夫人宛の手紙を忘れてはならない。「當地には櫻といふものもなく春になっても物足らぬ心地に候且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無く」（『漱石全集』巻十四 p 205）と手紙にあるが如く、ロンドンでの生活のうち、目で見えるもの、付き合った人は、「風流」ではないものばかりのように、漱石が決めてつけていた。この箇所を見れば、十年を隔てて再び漢詩を作り始めた時に、『思ひ出す事など』で触れたことを想起する。

當時の余は西洋の語に殆んど見當らぬ風流と云ふ趣をのみ愛してゐた。（中略）風流を盛るべき器が、無作法な十七と佶屈な漢字以外に日本で發明されたらいざ知らず、左もなければ、余は斯かる時斯かる場合に臨んで、何時でも其無作法と其佶屈とを忍んで、風流を這裏に楽しんで悔いざるものである。

（『漱石全集』巻八 p 285 - 286）

右の通り、漱石の愛する「風流」は、西洋語にも西洋にも見当たらないものである。この「風流」を適切に表現できるのは、十七字の俳句と漢詩しか考えられないと、漱石は言っている。そうなると、「風流」の生まれてこない西洋では、俳句と漢詩を通して、「風流」を楽しむことが出来るわけではない。従って、留学中の漱石には、漢詩創作はなかったということも、ごく当然のことだと思われる。と同時に、漢詩をあくまでも東洋風土に適切な表現手法だという漱石の姿勢も伺われる。

以上、鷗外と漱石にとっての漢詩創作の意義は、そもそも同様ではないということが明らかになった。漱石の場合は、漢詩は東洋的なものであり、「風流」と深くかかわっているものであるから、「風流」の生まれてこない西洋に留学しては、漢詩創作など出来

ようもない。すなわち、漢詩創作に限って言えば、漱石は東洋的なものと西洋的なものは、それぞれ結び付けようもなく、独立しているものだと考えている。これに反して、鷗外は東洋的なものと西洋的なものは、異質なものでありながら、その間に調和を求めて、その可能性が十分にあると鷗外が考えている。従って、この両者の相違を一言で言えば、鷗外に関心はあくまでも外に向いているのに対して、漱石の関心は、自己内面を見つめているということである。

三. 漢詩創作の特色

鷗外には、二百二十二首ほどの漢詩の創作数がある。一方、漱石には、二百八首ある。ここでは両者の漢詩創作を分類した上で、両者の特色を対照して究めていくことにする。両者の全部の漢詩作品を対照し、次の五点の基準に基づいて分類する。

a・雑誌、もしくは小説作品、出版物に発表したもの。ただし、最初、人に与えた漢詩であるが、後に雑誌に載せられたものを同じく a として考える。

b・次韻、応酬のために書いたもの。

c・ a, b を除いたもの。

イ・漢詩添削の面において、それぞれ世話になった代表的な人物がいる。ここでは、日記、書簡などの資料によって、鷗外が桂湖村に、漱石が正岡子規に、添削を乞うたことが判明したもの。

ロ・イと同じく、日記、書簡などの資料によって、鷗外が横川徳郎に、漱石が本田種竹、熊本第五等学校に勤めた同僚の長尾雨山に、添削を乞うたことが判明したもの。

さて、イ、ロについては若干の説明が必要である。周知のように、鷗外は佐藤応渠について漢詩を習っていた。これに関しては、鷗外が漢詩作品でよく触れている。一方、漱石

は、「落第」で三島中洲の二松学舎に入って漢詩文を習ったことを述べている。それから、壮年期に入った鷗外は戦争に行ったことにも関連があったであろうか、自分の部下に当たる横川徳郎に添削を求めるようになった。他方、漱石は、明治二十二年正岡子規との出合をきっかけにして、師とも親友とも言うべき正岡子規に批評を求めるようになった。そのほか、鷗外が桂湖村に、漱石が本田種竹、同僚の長尾雨山にも添削を乞うようなことをした。要するに、漢詩の添削を乞うことによって、両者が原点に止まらず、漢詩を通じた交遊が広まっていったことが分かる。特に、鷗外では、最後までこういった態度が変わらぬことに注目したい。鷗外の場合、漢詩の添削の面においては、まず、佐藤応渠から横川徳郎へ、そして、桂湖村に至るプロセスが見られる。それだけではなく、漢詩の添削の世話になったこの三人の先生に対する尊敬の念が並々ならぬものであることが知られる。すなわち、漢詩創作には、隠されている鷗外の人間性の暖かい一面があるということを忘れてはならない。

さて、鷗外のすべての漢詩作品を対象にして、時期別に、前述した五つの基準 a b c i ロによって表（四）が出来た。それぞれ「○」が付いている所は、すなわち当詩が五つの基準のうち、どれに該当するかを意味する。その上、書簡、日記などの資料に照らし合わせて添削されたことが分かるものを、「◎」で表記する。例えば、通番161の詩は、人と応酬するために作ったものであり、しかも横川徳郎に添削してもらったものである。表（四）の結果を纏めれば、表（五）aが出来た。その表（五）aに示された通り、公に発表されたものが、最も多く、それに次いで、感想を述べたものが二番目になっている。また人と応酬するために、作ったものは、数の上では、全体的にそれほど多くはないが、ここで見逃してはいけないのは、第六期の豊熟の時代に、雑誌に発表されたものも含めて、人と応酬するための作品が、一気に増加する傾向が見られるということである。その上、人と応酬したり、発表したりするものは、必ずと言ってもよいほど、師匠に添削をしてもらったものと重なっていることに注目したい。ここから、漢詩創作面においては、読者もしくは相手を意識しながら推敲に力を費すという慎重な鷗外の態度が伺われる。

一方、鷗外の場合と同じように、漱石のすべての漢詩作品を対象にして考察した結果によると、個人的な感想を述べたものが、最も多くあり、それから、人と応酬するために、作ったものが二番目になっている。全体的には、発表されたものが、一番少ない。なお、これらの発表されたものには、特徴が見られる。これらは、鷗外と同じように漢詩文の雑誌に発表されたものではなく、多くは、漱石の小説『草枕』『思ひ出す事など』に書き込

まれているのである。周知のように、『草枕』は、非人情の世界を描くものである。〈二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である〉（『草枕』P. 394、『漱石全集』巻二）と述べている通り、漱石では、東洋の詩歌、すなわち漢詩は非人情の世界に誘い込むものとして、認識されている。他方、『思ひ出す事など』は、修善寺で、血を吐き、人事不省の状態に陥っていた漱石が、甦生するとともに漢詩を多く作り出した事実を背景に、閑かな気持のもとで書かれたものである。両作品に共通しているのは、閑かな心持で、大自然を観照した上で、漢詩の効果を肯定するということである。これを見れば、両作品に、自分の漢詩作品を多く配列していた漱石の意図は自明であろう。漱石は詩を論ずるたびによく「風流」に触れている。こういった点は、『思ひ出す事など』では、随所に見られる。面白いことは、漱石のすべての小説を通して、考察した結果、「風流」がよく出てきた作品が、『思ひ出す事など』と『草枕』とであるということである。

さらに、五つの基準（a・b・c・イ・ロ）によって作った表（四）、表（六）の結果に基づいて鷗外と漱石を比較してみよう。まず、表（七）aを見よう。これは、各々五つの基準によって分類されたものの全漢詩作品に対する比率の統計図である。これに照らしてみると、次のことが分る。

- 一・鷗外には、公にされた漢詩が多くあるのに対して、漱石には、公にされず、個人の感想を述べた漢詩が多い。
- 二・漢詩添削の面においては、漱石が主に初期（第一期、第二期、第三期）に集中しているのに対して、鷗外は、後期（第五期、第六期、第七期）に集中している。ただし、青年期の作品の中には、鷗外が師事した漢詩の先生である佐藤応渠の評が多く残されている。これは、佐藤応渠に添削してもらったものだと見てもよかろう。しかし、どのように直されたかについては、資料が不明のままである。もし、佐藤応渠の評が残されたものを、添削してもらったものとして見たら、鷗外が、全時期の作品を通して、他人の添削を負った所が多いということは否定できない。それにもかかわらず、後期になると、鷗外は自分の社会的な地位が高まってくるにつれて、世間のことにも気を使ったためか、漢詩の添削を熱心に乞うようになったことは、改めて強調したい。だが、鷗外が他者の添削によって漢詩作品を完成したとは言え、決して鷗外が軽い気持ちで漢詩創作に臨んだわけではない。鷗外の漢詩創作の周辺

を明らかにする時、鷗外の横川徳郎宛・桂湖村宛の書簡に示されるように、熱心に漢詩創作の推敲に質問をしたり素直に他者の意見を受け入れたりした真剣な態度が見られる。

三・正岡子規が添削した漱石の漢詩は、全体に対して十三パーセントを占めている。漱石にとって、正岡子規が大きな存在であることはこの比率からも伺われる。特に、明治二十二年、この二人の出会いをきっかけにして、漱石が子規に刺激されて、多くの漢詩を作り出したことは周知の通りである。一方、横川徳郎が添削した鷗外の漢詩は、全体に対して、十パーセントを占めている。漱石の場合と同じように、鷗外にとって横川徳郎は大きな存在であるはずである。鷗外における横川徳郎の影響は、評価されるべきものである。

これに加えて、表（五）bと表（七）bを対比しながら、もう一度検討してみよう。表（五）bは、鷗外の漢詩をa b cの三つの基準によって分類した数を、時期別に表示するグラフである。鷗外の各時期の変化の中で、一番目につくのは、最初は個人の感想を述べたものが多いにもかかわらず、だんだん減ってしまうことである。そのほか、発表されたもの及び人と応酬するものは共に一時期に減っているが、再び通常に戻っている。その時期別の変化はさほど激しいものではない。

これと反対に、漱石の場合、最初個人の感想を述べたものは非常に少ないが、晩年になって、圧倒的に増えてくる。一方、人と応酬するために書いた漢詩の数は減っていくばかりである。そうして、発表されたものは、一時期多くなったが、その後は減っていく一方である。特に晩年になって激増している漢詩作品は、他人の添削に負う所がなく、自己の内面ばかりに着目した作品だと言えよう。

誤解を招かないために、説明しておく。作品が作者の手により作られた以上、それは作者の自己表現をしたものであることは誰も否認しない。そうして、漢詩作品もその一つである。しかし、雑誌の読者もしくは相手を意識して作る場合は、全く自己のために楽しんで作る場合と比較して見れば、創作動機は、多少単純でなくなっているであろう。すくなくとも、相手の評価、あるいは、相手の反応を考慮に入れるであろう。そうすると、同じ自己表現をするとはいえ、その自己内面を表現する率直さの度合は少し違っていく。従って、作品が作者の自己表現をするものだと認めた上で、さらに自己表現の率直さの度合に目を

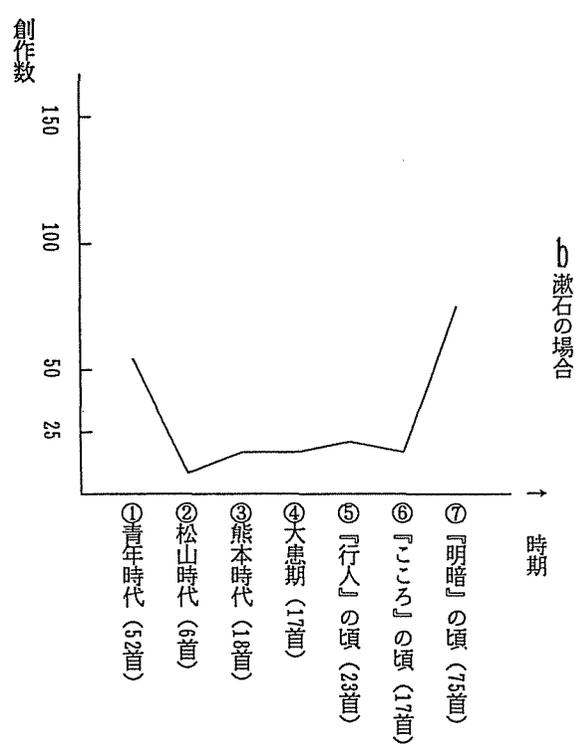
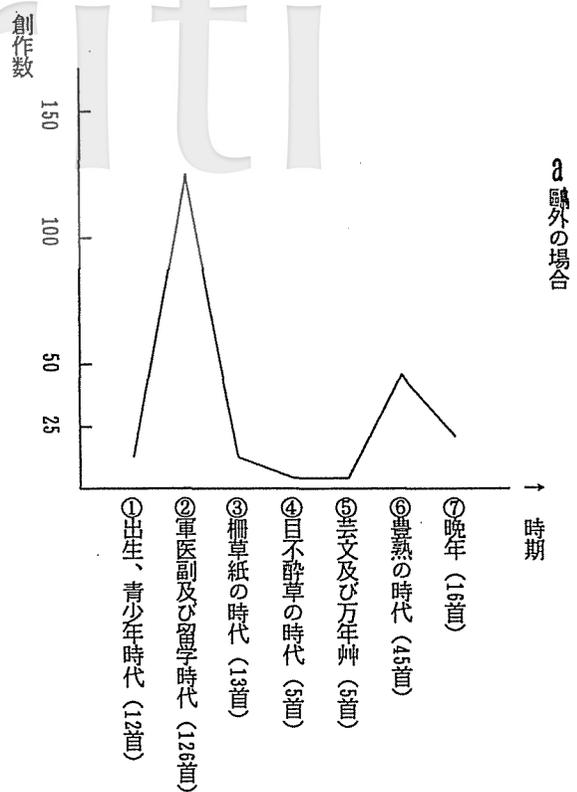
向けて、前述した五つの基準に沿って、研究対象を分類したのである。

以上、表（四）（五）（六）（七）をまとめて、漢詩創作における鷗外と漱石の特色を述べたい。次の三点である。

- 一・鷗外は外来の要請に応じるために漢詩を作っているのに対して、漱石は自己内面を表現するために漢詩を作っている。
- 二・鷗外の作った漢詩の大部分は、雑誌を通じて世間に公表されている。これと違って、漱石の作った漢詩の大部分は公表されていない。
- 三・二と関連して、鷗外の漢詩の多くは、世間に発表するものであるがゆえに、よく他者に添削をしてもらった上で、はじめて公表されていた。これに対して、漱石の漢詩はあまり公表せず、また他者の添削をもしてもらわず、自己内面を表現するためのものである。従って、漢詩創作における両者の態度は、鷗外が世間に向けて慎重であり、漱石が自己の内面に向けて自分で楽しむ気楽である。

前述した三点を、総合的にまとめると、漢詩創作における鷗外と漱石の違いは、何よりも、まず、鷗外が外発的に、漱石が内発的に、漢詩創作に従事したことが結論になる。換言すれば、漢詩創作のエネルギーは、鷗外が外にあり、漱石が内にあるということが言える。

表 (一) ー 創作時期を縦軸にして、創作数を横軸にして、作成したグラフは次のようである。



表(二) 詩スタイルの内訳

a 賦外の場合

時期 詩型	①出生、青 少年時代	②軍医副及 び留学時代	③桐草紙の 時代	④目不醉草 の時代	⑤芸文及び 万年艸時代	⑥豊熟の時 代	⑦晩年	数	比率
四古			2	1		1		4	2%
五古	2	1	2			3	5	13	6%
七古	2	8		1		1		12	5%
雑古		1						1	1%
五絶	2	6	1			6	2	17	8%
七絶	2	109	4	3	4	21	6	149	67%
五律	1					4	1	6	3%
七律	3	1	4		1	9	2	20	9%
数	12	126	13	5	5	45	16	222	100%
比率	6%	57%	6%	2%	2%	20%	7%		

表 (二) ㊦ 漱石の場合

時期 詩型	①青年時代	②松山時代	③熊本時代	④大忠期	⑤「行人」 の頃	⑥「ころ 」の頃	⑦「明暗」 の頃	数	比率
四古									
五古	1		8	1				10	5%
七古	2							2	1%
雑古									
五絶	3		6	9	19	10	7	54	26%
七絶	32			4	3	7	2	48	23%
五律	8	1	1	1	1			12	6%
七律	6	5	3	2			66	82	39%
数	52	6	18	17	23	17	75	208	100%
比率	25%	3%	9%	8%	11%	8%	36%		

表 (三) 創作時間順の排列対照

創作時間	臥外 (222首)	湫石 (208首)
明14	①期 12首 29首 北游日乗 29首 後北游日乗	138首
明15.3		
明15.9		
明17.8	②期 40首 航西日記 18首 蜀逸日記	
明18.7		
明21.7	10首 還東日乗	
明22.8	③期 13首	①青年時代 52首
明22.11		
明27.3		②松山時代 6首
明28.5		
明28.9		
明29.1	④期 5首	③熊本時代 18首
明29.5		
明32.4	⑤期 5首	
明33		
明34.6		
明37.12		④大忠期 17首
明38.6		
明43.3	⑥期 45首	⑤『行人』 23首
明43.7		
明43.10		
明45.5		⑥『ころ』 17首
大1.11		
大3		
大5.春		⑦『明暗』 75首
大5.8		
大5.11		
大6.10	⑦期 16首	
大7.1		
大9.1		

表(四) 五つの基準による各時期別の分類表— 匪島外の場合

内容 時期	通番	詩題	a	b	c	イ	ロ	補足
① 出生 青年 期	1	庚辛歳旦醉歌(七古)	○					明24.5「衛生療病志」第十七号
	2	詩以代柬復松溪子(五古)	○					明24.2「石見郷友会雑誌」第一号
	3	辛巳臥病偶友人某見訪賦似 (五律)	○					同①
	4	辛巳十月十二日作(七律)		○				
	5	待春(七絶)		○				小金井喜美子所蔵
	6	訪應渠先生千住居(七律)	○					同①
	7	呈應渠先生(五絶)	○					同①
	8	書感(七絶)	○					同①
	9	茶碗(五絶)	○					同①
	10	解剖(七古)	○					同①
	11	送友人之德國(五古)	○					同①
	12	訪應渠先生居 偶作(七律)	○					同①
② 軍 医 副 及 び 留 学 時 代	13 ↓ 41	「北游日乗」29首			○			
	42 ↓ 70	「後北游日乗」29首		2 首	27 首			
	81 ↓ 110	「航西日記」40首	○					明22.4「衛生新誌」第二回以下八回にわた って連載
	111	書感(七律)			○			
	112	寄萩原國手賀令息午生君誕辰 (七古)	○					
	113	明治十九年九月二日作(七絶)			○			
	114	路易二世を詠ず(七絶)			○			
	115	屈頗を詠ず(七絶)			○			
	116	永松篤蕪に寄す(七絶)		○				
	117	三浦に示す(七絶)		○				
	118	中濱に別告ぐ(七絶)		○				
	119	踏舞歌應囀(七古)		○				
120	明治二十年九月十七日作 (七絶)			○				
121	同右(五絶)			○				

	122	詠柏林婦人七絶句（七絶） 7 首			○			
	↓							
	128							
	129	夜賦詩寄惺堂（七絶） 4 首			○			
	↓							
	132							
	133	明治二十一年八月九日の作 （七絶）				○		
	134	賦詩贈興然（七絶）			○			
	135	和石君同題詩（七絶）			○			
	136	八月十六日作（七絶）				○		
	137	八月三十日作（七絶）				○		
	138	日東七客歌（七古）				○		
③ 柵 草 紙 の 時 代	139	答今井武夫君（四古）	○					明22. 8「東京医事新誌」第五百九十三号
	140	讀第三駁寄今井武夫君用鷗外漁 史韻（四古）	○					明22. 10「東京医事新誌」第六百三号
	141	未曾醒（七絶）	○					明23. 2「柵草紙」第五号
	142	百尺松（七絶）	○					同右
	143	目黒比翼塚（七絶）	○					明24. 1「千朶山房に會する記」を「國民新 聞」に
	144	明治二十七年十月十日作 峽南早川君有詩見贈乃次韻却寄 （七律）			○			
	145	贈芳翠畫伯（七絶）			○			
	146	途上所見（五絶）				○		
	147	擬寄内（五古）				○		
	148	旅順戦後書感次韻（七律）			○			
	149	乙未春日在金州風雨不輟者數日 聯句以排悶（五古）				○		
	150	台灣軍中野口寧齋有詩見寄次韻 （七律）			○			
	151	寄懷早川峽南次其送別韻 （七律）			○			
④ 目 不 醉 の 時 代	152	讀檄寄一橋同窓會幹事次韻 （七古）	○					
	153	戌小倉寄神保在漢口次韻 （七絶）	○					
	145	同右（七絶）	○					
	155	大嶋先生銅像銘（四古）	○					
	156	「神農圖」贊（七絶）	○					

⑤ 万年文艸及び時代	157	即事次岡部譯言韻 (七絶)	○			明37. 12「心の花」第八卷第九号
	158	次韻書感 (七絶)	○			明38. 4「心の花」第九卷第四号
	159	同右 (七絶)	○			同右
	160	同右 (七絶)	○			同右
	161	次慶雲堡岳翁有詩見贈次韵却寄 (七律)	○	○	◎	
⑥ 豊熱の時代	162	堀賢平像讚 (四古)		○		
	163	大正乙卯春日恭賦 (五律)		○	◎	
	164	題支那美術彫塑 (七律)		○	◎	
	165	椿山老公生日 (七律)		○	◎	
	166	次韻況齋先生 (七絶)		○	◎	
	167	同右 (七絶)		○	◎	
	168	同右 (七絶)		○	◎	
	169	奉和聖製詠看護婦 (七絶)		○	◎	
	170	次韵長町耕平詠讚岐齋田 (七絶)		○		
	171	贈荒木鳳岡次其韵 (七絶)		○	◎	
	172	同右 (七絶)		○	◎	
	173	同右 (五絶)		○	◎	
	174	大正四年六月二十七日岩代國阿武隈河上。有二童遊嬉。曰遠藤藤市五歳。曰馬場貞次郎六歳。既而遠藤溺將死。馬場赴援得免。香川香南有並小序紀之。予亦次韻敬賀。 (七絶)		○	◎	
	175	哭川上巖華 (五絶)		○	◎	
	176	餽鮎 (七律)		○	◎	
	177	譯本獨逸國民之將來題辭 (七律)	○		◎	大4. 7 帝國軍人後援会發行
	178	贈香川香南次其縱筆韻 (七律)		○	◎	
	179	雜誌藝園題辭 (五絶)	○		◎	望月慶一の發行
	180	次白水孤峰韵 (七絶)		○	◎	
	181	一夫 (七律)		○	◎	軍国の記者山路成り夫に
	182	後援題辭 (七絶)		○	◎	松原駿三郎に
	183	諷永懷録 (七絶)		○	◎	外崎覚に
	184	去故 (五律)			◎	
	185	大嘗祭 (七絶)	○			大4. 11. 3「日日新聞」
186	題譯本波斯詩 (七絶)	○		◎		
187	題千葉周作劔道秘訣 (五律)	○		◎	大5. 1「大正詩文」第一帙第三集	
188	贈野口小蘋 (五律)	○		◎	大5. 2「大正詩文」第一帙第四集	
189	丙辰夏日校水沫渠感觸有作 (七絶)	○			大5. 8「縮刷水沫集」	
190	同右 (七絶)	○			同右	
191	回頭 (七絶)	○			大5. 9「大正詩文」第二帙第五集	

	192	題羽化憶舊談（七絕）	○				大5. 9同右
	193	復桑田鳴海（五絕）		○			
	194	支那戲曲集題辭為今開天彭作（七律）	○			◎	大6. 2「大正詩文」第三帙第四集
	195	題史可法遺書拓本（七律）	○			◎	大6. 3「大正詩文」第三帙第五集
	196	丙辰乞骸骨同班贈書為贈賦謝（五古）	○			◎	大6. 4「大正詩文」第三帙第六集
	197	現代俳畫集題詩（七絕）	○			◎	大6. 4俳畫堂發行
	198	柳村遺稿題辭（五古）	○			◎	大6. 6「大正詩文」第四帙第一集
	199	椿山公八十生日賦呈（五古）	○				大6. 7「大正詩文」第四帙第二集
	200	次唐陽見胎韻（七律）	○				大6. 8「大正詩文」第四帙第三集
	201	中村不折畫集題辭（七絕）	○				大6. 9「大正詩文」第四帙第四集
	202	救急法題詩（七絕）	○				同右
	203	加藤雄吉折柬謂刊尾花集裁詩代序（七古）	○			◎	大6. 10「大正詩文」第四帙第五集
	204	題譯本舞姬（五絕）	○				大6. 11「大正詩文」第四帙第六集
	205	題對妻策（五絕）	○			◎	大6. 11同右
	206	薩州名家侍題詞（七絕）		○		◎	
㊦ 晩 年	207	次俞揄孫見寄詩韻（七律）	○			◎	大6. 1「大正詩文」第五帙第一集
	208	十二月廿五日作（七絕）	○			◎	大7. 2「大正詩文」第五帙第二集
	209	東條琴台題詩（七絕）	○				大7. 2西尾豐作發行
	210	二月二十三日作（七絕）			○	◎	
	211	寄藍田先生（七絕）	○			◎	大7. 3「大正詩文」第五帙第三集
	212	爽江寫畫圖（七絕）	○				大7. 6「大正詩文」第五帙第六集
	213	贈學圃詞宗（五律）	○				大7. 7「大正詩文」第六帙第一集
	214	次韻矢島膽山罷官詩（七絕）	○				
	215	北岡子（五古）	○			◎	大7. 10「大正詩文」第六帙第四集
	216	白木畫帖題辭（五古）	○				大7. 11「大正詩文」第六帙第五集
	217	「迎俗域美術講話」題辭（五絕）	○				大7. 11東京實文館發行
	218	大正七年十一月作（五古）		○			
	219	同右（五古）		○			
	220	戊午季秋在南都讀歷史園錄代柬寄高橋健自（五古）	○			◎	大8. 3「大正詩文」第七帙第三集
	221	次韻川鳩氏慶治（七律）		○		◎	
	222	題三條公書讀居南海祭楠氏文後（五絕）		○			
合計			92	50	80	15	23
比率			41 %	23 %	36 %	7 %	10 %

表 (五) a b c の三つの基準による各時期別のグラフィー (随外の場合)

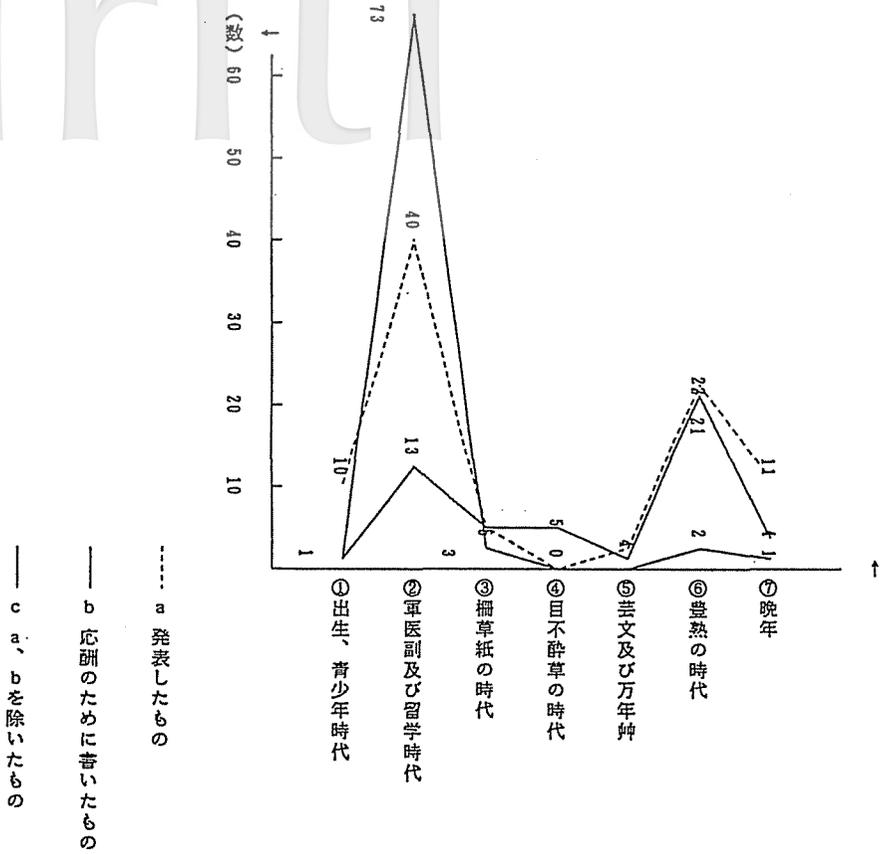
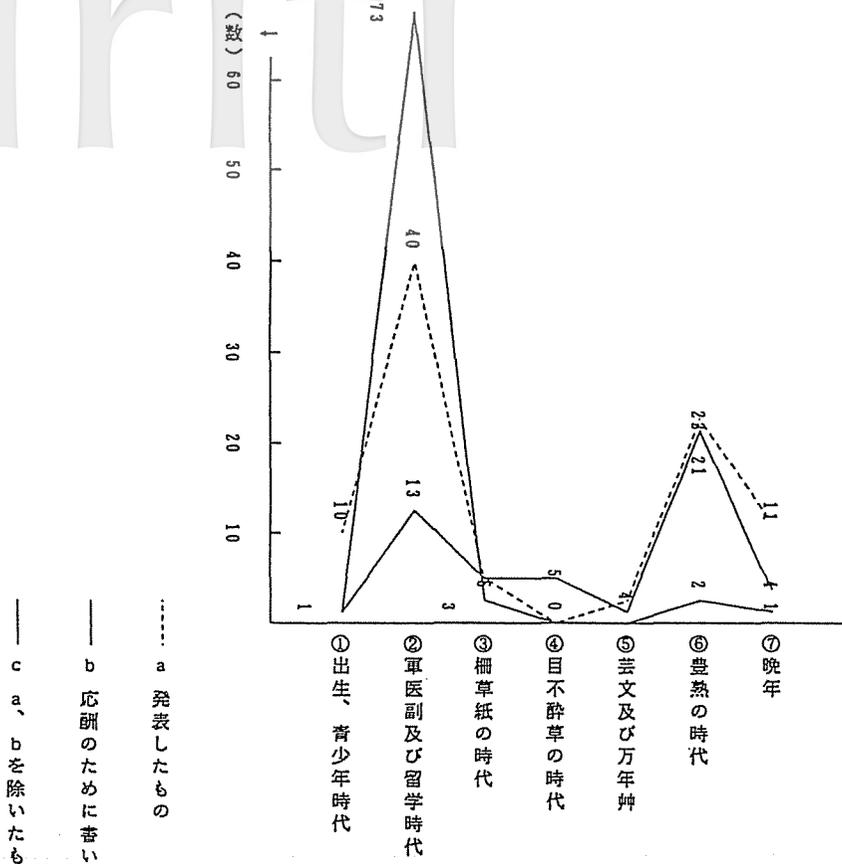


表 (五) a 五つの基準による各時期別の漢詩数 -- (随外の場合)

時期 基準	① 出生、 青少年時代	② 軍医副及 び留学時代	③ 柵草紙の 時代	④ 目不酔草 の時代	⑤ 芸文及び 万年艸時代	⑥ 豊熟の時 代	⑦ 晩年	合計
a	10	40	5		4	22	11	92
b	1	13	5	5	1	21	4	50
c	1	73	3			2	1	80
イ					1	22		23
ロ						8	7	15
合計	12	126	13	5	5	45	16	222

表 (五) b a. b. c. の三つの基準による各時期別のグラフィー (国外の場合)



..... a 発表したもの

—— b 応酬のために書いたもの

—— c a、bを除いたもの

表 (六) 五つの基準による各時期別の分類表——(漱石の場合)

内容 時期	通 番	詩題	a	b	c	イ	ロ	補足
① 青 年 時 代	1	鴻台 (七絶)	○					明39.6「時運」雑誌に
	2	同上 (七絶)	○					同上
	3	題畫 (七律)	○					同上
	4	送奥田詞兄歸國 (七律)	○					同上
	5	離愁次友人韻 (七絶)	○					同上
	6	即時 (七絶)	○					同上
	7	即時 (五絶)	○					同上
	8	同上 (五絶)	○					同上
	9	山路觀楓 (七絶)	○					明22.11青年の作文に見られる
	10	函山雜咏 (五律)						
	↓	八首		○			○	子規に呈し、斧正を乞う。子規の朱批ある。
	17							
	18	送友到元函根 (七絶)						
	↓	三首			○			同上
	20							
	21	歸途口號 (七絶)						
	↓	二首			○			同上
	22							
	23	「七艸集評」 (七絶)						
	↓	九首			○			子規の「七艸集」に対する批評 明22.5
	31							
	32	「木屑録」						
↓	一四首			○		○	明22.9子規に示す。子規の朱批ある。	
45								
46	御返事呪文 (七絶)		○				子規宛の書簡に 明24.7.24	
47	無題 (五絶)		○				子規宛に 明22.9.20	
48	無題 (七絶)		○				子規宛に 明23.8末	
49	無題 (五古)		○				同上	
50	謝正岡子規見恵小照次其所贈詩韻却呈 (七律)		○				明23.10.24	
51	無題 (七絶)		○				菊池謙二郎宛の書簡に 明27.3.9	
52	大井川舟中 (七絶)				○			
② 松 山 時 代	53	無題 (七律)						
	↓	四首			○		○	子規宛の書簡に斧正を乞う 明28.5.28
	56							
	57	無題 (七律)			○			子規宛、右の追加 明28.5.30
58	無題 (七律)			○			子規宛のはがき 明29.1.12 子規詩の次韻	

③ 熊 本 時 代	59	丙申五月恕卿所居庭前生蕙芝恕卿因徵余 時余辭以不文恕卿不聽賦以為贈恕卿者片				○	本 田 種 竹	明29.11.15 片嶺忠に与える。 本田種竹の朱批があるよし
	63	嶺氏余傾友也 (五絶) 五首						
	64	無題 (五律)					○	子規宛の書簡に 明30.12.12
	65	春興 (五古)		○				長 『草枕』第十二章に 明31.3
	66	同上 (五古)					○	長 明31.3の作
	67	春日静坐 (五古)		○				長 『草枕』第六章 明31.3
	68	菜花黄 (五古)		○				長 『草枕』首章に似た心境
	69	客中逢春寄子規 (五古)					○	明32
	70	無題 (五古)					○	同上
	71	古離別 (五古)					○	長 明32.4
	72	失題 (五古)					○	長 同上
	73	無題 (七律)					一	明33
		↓	三首				首	
	76	無題 (五絶)						○
④ 大 忠 期	77	無題 (五絶)					○	明43.7.31の「日記」に
	78	無題 (五絶)		○				明43.9.20『思ひ出す事など』第二十二章に
	79	無題 (七絶)		○				明43.9.22『思ひ出す事など』第八章に
	80	無題 (五絶)		○				明43.9.25『思ひ出す事など』第五章に
	81	無題 (五絶)		○				明43.9.29『思ひ出す事など』第十章に
	82	無題 (五絶)		○				明43.10.1『思ひ出す事など』第三十章に
	83	無題 (五絶)		○				明43.10.2『思ひ出す事など』第二十九章に
	84	無題 (七律)		○				明43.10.4『思ひ出す事など』第三十二章に
	85	無題 (七絶)		○				明43.10.5『思ひ出す事など』第十三章に
	86	無題 (五律)		○				明43.10.6『思ひ出す事など』第二十三章に
	87	無題 (五絶)		○				明43.10.7『思ひ出す事など』第二十五章に
	88	無題 (五絶)		○				明43.10.8『思ひ出す事など』第二十四章に
	89	無題 (七絶)		○				明43.10.10『思ひ出す事など』第二十八章に
	90	無題 (五古)		○				明43.10『思ひ出す事など』第十五章に
91	無題 (七絶)		○				明43.10.25『思ひ出す事など』第三十一章に	
92	無題 (五絶)		○				明43.10.27『思ひ出す事など』第十九章に	
93	無題 (七律)		○				明43.10『思ひ出す事など』第四章に	
⑤ 『 行 人 』 の 頃	94	春日偶成 (五絶) 十首					○	明45.5.24 明45.5.23の「日記」に見える
	103							
	104	無題 (五絶)					○	明45.6の「日記」に見える
	105	同上 (五絶)				○		同前 明45.6.3 湯浅康孫宛の書簡に
	106	同上 (五絶)				○		同104
	107	無題 (五絶)				○		明45.7の「日記」に見える
	108	酬横山畫伯惠畫 未定稿 (五律)				○		明45.7の「日記」に見える
109	酬横山畫伯惠畫 (五絶)				○			

	110	明治百家短冊帖序（七絶）	○			明45.7の「日記」に見える
	111	妙雲寺廻濕（七絶）		○		大元9.17「日記」 塩原の平元徳宗師に依頼された
	112	題自畫（七絶）			○	大元11「日記」に
	113	同上（五絶）			○	同上
	114	無題（五絶）			○	
	115	題畫竹（五絶）			○	
	116	無題（五絶）			○	
⑥ 「 こ こ ろ 」 の 頃	117	題墨竹（七絶）			○	大3
	118	題自畫（七絶）			○	
	119	題自畫（七絶）			○	大3.2
	120	題自畫（七絶）			○	大3
	121	得健堂先生自壽詩及七壽杯次韻以祝 （七絶）			○	同上
	122	閑居偶成功似臨風詞兄（五絶）			○	同上
	123	遊子吟贈森園月（五絶）			○	大3.2
	124	題自畫（五絶）			○	
	125	題自畫（五絶）			○	大3.11
	126	題自畫（五絶）			○	大4.4
	127	題西川一草堂畫（七絶）			○	
	128	題自畫（五絶）			○	
	129	題結城素明畫（五絶）			○	
	130	題自畫（五絶）			○	大5.1
131	題自畫（五絶）			○	大5春	
132	題自畫（七絶）			○	同上	
133	無題（五絶）			○		
⑦ 「 明 暗 」 の 頃	134	無題（七律）			○	大5.8.14夜
	135	無題（七律）			○	大5.8.15
	136	無題（七律）			○	同上
	137	無題（七律）			○	大5.8.16
	138	無題（七律）			○	同上
	139	無題（七律）			○	大5.8.19
	140	無題（七律）			○	大5.8.20
	141	無題（七律）			○	大5.8.21 久米正雄、芥川龍之介宛の書簡
	142	無題（七律）			○	大5.8.21
	143	無題（七律）			○	大5.8.22
	144	無題（七律）			○	大5.8.23
	145	無題（七律）			○	大5.8.26 中村不折「丙辰澆墨」画集に
	146	無題（七律）			○	大5.8.28
	147	無題（七律）			○	大5.8.29
148	無題（七律）			○	大5.8.30	
149	無題（七律）			○	同上	
150	無題（七律）			○	大5.9.1	
151	無題（七律）			○	同上	

152	無題 (七律)	○	大5. 9. 2
153	無題 (七律)	○	同上
154	無題 (七律)	○	大5. 9. 3
155	無題 (七律)	○	大5. 9. 4
156	無題 (七律)	○	同上
157	無題 (七律)	○	大5. 9. 5
158	無題 (七律)	○	大5. 9. 6
159	無題 (七律)	○	大5. 9. 9
160	無題 (七律)	○	大5. 9. 10
161	無題 (七律)	○	大5. 9. 11
162	無題 (七律)	○	大5. 9. 12
163	無題 (七律)	○	大5. 9. 13
164	無題 (七律)	○	同上
165	無題 (七律)	○	大5. 9. 15
166	無題 (七律)	○	大5. 9. 16
167	無題 (七律)	○	大5. 9. 17
168	無題 (七律)	○	大5. 9. 18
169	無題 (七律)	○	大5. 9. 19
170	無題 (七律)	○	大5. 9. 20
171	無題 (七律)	○	大5. 9. 22
172	無題 (七律)	○	大5. 9. 23
173	無題 (七律)	○	同上
174	無題 (七律)	○	大5. 9. 24
175	無題 (七律)	○	大5. 9. 25
176	無題 (七律)	○	大5. 9. 26
177	無題 (七律)	○	大5. 9. 27
178	無題 (七律)	○	大5. 9. 29
179	無題 (七律)	○	大5. 9. 30
180	無題 (七律)	○	大5. 10. 1
181	無題 (七律)	○	大5. 10. 2
182	無題 (七律)	○	大5. 10. 3
183	無題 (七律)	○	大5. 10. 4
184	無題 (七律)	○	大5. 10. 6
185	無題 (七律)	○	大5. 10. 7
186	無題 (七律)	○	大5. 10. 8
185	無題 (七律)	○	大5. 10. 9
188	無題 (七律)	○	大5. 10. 10
189	無題 (七律)	○	大5. 10. 11
190	無題 (七律)	○	大5. 10. 12
191	無題 (七律)	○	大5. 10. 15
192	無題 (七律)	○	大5. 10. 16
193	無題 (七律)	○	大5. 10. 17
194	無題 (七律)	○	大5. 10. 18
195	無題 (七律)	○	大5. 10. 19
196	無題 (七律)	○	大5. 10. 20

197	無題 (七律)			○		大5. 10. 21
198	無題 (五絕)			○		同上
199	無題 (五絕)			○		同上
200	無題 (五絕)			○		同上
201	無題 (五絕)			○		大5. 10. 22
202	無題 (五絕)			○		同上
203	無題 (五絕)			○		同上
204	元成禪人自德源大會回鉢到余家洩留旬日臨 去需余畫余為禪人作墨竹三竿併題詩以贈 (七絕)		○			大5. 10. 31
205	丙辰十月余為元成禪人作墨竹越一日見壁間 所挂圖興忽發乃為珪堂禪人拙老作松一株配 以石二三不知禪人受余贈否 (五絕)		○			大5. 11. 1
206	無題 (七律)			○		大5. 11. 13
207	無題 (七律)			○		大5. 11. 19
208	無題 (七律)			○		大5. 11. 20
合計		30	69	109	26	11
比率		14 %	33 %	53 %	13 %	5 %

表 (七) a 五つの基準別による鷗外と激石との対比表

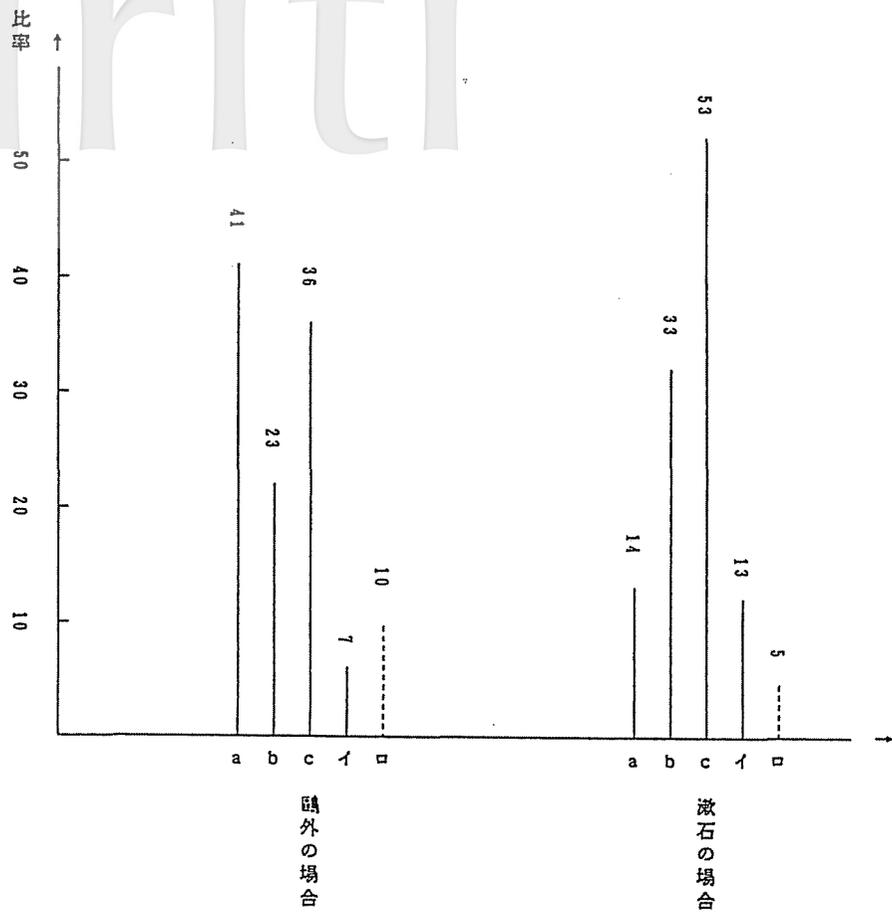


表 (七) b a. b. c. 三つの基準による各時期別のグラフー (漱石の場合)

